御陵衣祭を拝観して（続）

――その一『流鏑馬』伝統行事のこと――

徳丸節子

一、はじめに

私は、昨年『さくらお百二十号』に『御陵衣祭を拝観して』と題して、書かせていただいた。御陵衣祭を拝観した時の感動は、今なお私の胸に迫る思いであり、強く印象づけられている。

書かせていただいた上には、内容的にも正確にしかも説得力のある表現をしたいと考えていた。

ところが、今年は郷土文化研究会の方々とご一緒に参列し、いくつかの課題があることや、未調査の部分があることに気づき、紙面の都合上、二回に分けて述べさせていただくことにした。

二、今年の御陵衣祭

旧暦五月五日端午の節句は、今年は六月廿二日(火)に当たり、晴天に恵まれた一日であった。

地御前神社では、午後二時から祭式・舞楽・流鏑馬（やぶさめ）神事と、厳粛に取り行われ、地元の方々が、写真やビデオ撮影をされたり、各新聞社の取材やＮＨＫのテレビ関係者等の来訪も重なり、活気ある雰囲気であった。

昨年と同様に、厳島神社から、野坂元良宮司さんをはじめ、神事を取り行う神職の方達が、早々においでいただき、諸準備を整えておられ、拝殿にて参拝する人達も、緊張感に包まれていた。

祭式の過程については、前に書かせていただいたので、今回は省略させていただく。

やがて、玉串奉奠（たまくしほうてん）へと進行。地元の代表者の方や、赤い鉢巻をした幼な子を抱いた母親が、榊を神職の方から受け取られ、しずしずと神前に捧げる様子を、参拝者は静かに見守っていた。

続いて、最前列に座していた郷土文化研究会の井原さんに、そのお役が回って来たこともあり、注意力を集中して見つめる私達にとっては、またひとしお関わりの深さを感じ取るひとときであった。

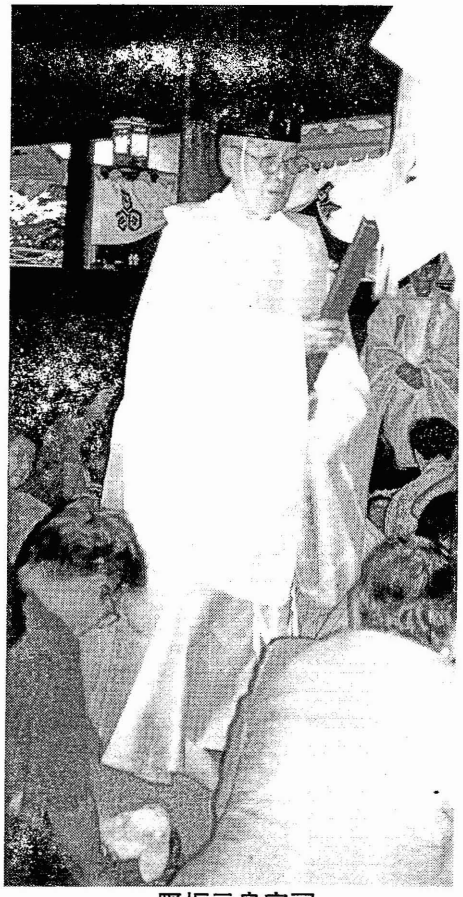
長さ一米を越す大きい御幣を、掲げられた野坂宮司さんにより、御幣奉戴を承けた参詣者達は、身も心も引き締まる思いで、その場に望むことができた。

また、美しい雅楽の調べにそって、陵王・納曽利と舞が続き、魅了された思いであった。

途中で、幕の間から境内を見ると、驚いたことに地御前小学校五年生の児童達が、担任の教師に引率されて、見学している姿が見られ、昨年とは随分異なっている様子に、わが目を疑う思いだった。

後から聞いたことではあるが、総合学習の時間を費やしての参加だったことを知った。

拝殿には、紅白の幕が張り巡らされており、境内からの拝観では、その様子をはっきりと見られなかったかと思うが、美しい管弦の調べは、響いていたことでもあり、雰囲気を感じとるには十分であったに違いない。



野坂元良宮司

三『流鏑馬』を伝統文化として学ばせた経緯

去る十月二日(土)中国新聞の夕刊『でるた』欄に『伝統文化の継承』と題したさい、拙文を載せていただいた。

それは、先輩の元上司から、ご紹介いただいたことでもあり、これからの日本を背負って立つ青少年に、理解と関心を抱かせたいという私の願いからでもあった。

昨年、伺った話では「御陵衣祭の案内のポスター一枚を貼るにも、気を使っている」という遠慮がちな取り組みの実態があったという、こういった郷土文化に対する考え方があったというのに、この度の変容は、如何したことであろうか。

地域の保護者「小中学校の」の中にも、御陵衣祭を年中行事のまつりとして捉えずに、宗教的意